

多様な人々の課題を知る地域貢献の試み

Community Engagement through Understanding Diverse Challenges

迫 共¹⁾、來須 真紀²⁾、菅川裕希¹⁾、児玉勝司¹⁾、児玉理紗¹⁾

Tomoya SAKO, Maki RAISU, Yuki SUGEKAWA, Katsushi KODAMA, Risa KODAMA

比治山大学・比治山大学短期大学部¹⁾、広島市児童相談所²⁾

Hijiyama University and Hijiyama Junior College; Hiroshima City Child Guidance Center

Key words: Diversity and Inclusion, Social Barriers, Multicultural Communication

目的

本発表は、令和7年度比治山大学の地域貢献プロジェクト実施に際して、複数学科の教員、学生が連携し、大学近隣地域に住む多様な人々の生活ニーズを知ることと、社会改善を意識した模索の過程を報告するものである。

方法

大学近隣地域に住む多様な人々を授業におけるゲストスピーカーとして招聘し、かれらの生活ニーズを聞き取る。例えば、外国にルーツをもつ人々や障害をもつ人々の日常生活ニーズは、一般的な大学生が社会のマジョリティとして日常生活を送るだけでは気づかないことが多数含まれている。それらは多様な人々の社会参画を阻む無意識的なバリアーとなる。多文化コミュニケーション、社会福祉学、教育・保育学などの分野の授業に招かれたゲストスピーカーの語りを学生と共に聞き、主体的に社会変革を考えるきっかけ作りを行う。

また、多様な人々とともに街歩きをするイベントを通して、身近な街に潜むバリアーを学んでいく。例えば、障害を持つ人や非日本語話者にとって、公共交通機関を利用して移動することにどれだけのストレスがかかるのか。かれらとともに街歩きをし、街歩きマップを作成しながら、どこにどのようなバリアーがあるのかを知り、その改善策についても検討する。多様な人々とともに豊かに生活できる社会の実現について、大学生とともに考えていく。

事例①

発表者の一人である來須は、令和7年度の「社会的養護Ⅰ」（迫担当）におけるゲストスピーカーであった。外国ルーツの児童が6割を超える基町小学校（広島市）での教員経験から、現職である児童相談所での支援は、ともに多様な課題を抱える子育て家庭への支援として共通点を有する。

基町小学校では、「よその国の悪口を言わない」「他人の名前を笑わない」といった標語が掲げられ、多様な出自をもつ子ども同士が仲良く生活できる基盤づくりに工夫がなされていた。一方、平和学習について、外国ル

ーツをもつ児童から、日本人が驚くような言葉が出されたエピソードが紹介された。これを放置すれば、成人間ではヘイトスピーチとして問題となりうる。小学校段階で対応し、相互理解を進めるために考えられた事例が、教職や保育職を目指す学生に共有された。

事例②

令和7年度の「異文化理解入門」（菅川担当）のゲストスピーカーであるA氏は、シリア出身で、戦争によって母国から離れ、広島で子育てをする女性である。

彼女の経験は、外国にルーツをもつ子育て期間の人々への支援の少なさを示している。行政が案内したのは日本語教室にすぎず、日常生活支援や保育所の情報、就労支援などはA氏に届かなかった。

A氏のような外国にルーツをもつ人々は、言語や宗教、文化や習慣の違いから、コミュニケーションをとることが困難と見なされがちであり、近隣住民のネットワークからも排除されやすい。A氏やその家族は、外国にルーツをもつ人々を対象とした民間団体の支援がなければ、十分な市民生活が送れない状態にあったにもかかわらず、生活ニーズを聞き取られることなく、自助努力だけに任されていた。

彼女らの生活が、出自の近い人々のコミュニティだけに留まるとすれば、生活の困難さが社会のバリアーによって多くの人々に気づかれないこととなる。

考察

多様な人々の参画に開かれた社会は強みを持つ。複数学科の教員、学生とともに人々の生活ニーズを聞き取り、改善を検討する試みから、学生の主体的な社会参画を導く授業を複数実施した。学生の受け止めは多様であり、肯定的なものばかりではない。しかし、多様な人々の生活ニーズに触れ、他者の視点から社会を考えた経験は、将来の共生社会を目指すうえで学生の選択肢を増やし、柔軟な発想のもとになると考える。

※本研究に際して、令和7年度比治山大学助成を受けた。